

# ツクシとスギナ

外見上は全く別の植物に見えますが、童謡でも「ツクシ誰の子スギナの子」と唄われた「すぎな」と「つくし」は同じ植物の違う部位です。

「すぎな」は栄養茎という部位で、棒状の葉で光合成をおこない、5〜7月ごろに成長、地域にもよりますが冬場以外は常に生えている雑草です。

一方、「つくし」は孢子茎という部位で、早春に繁殖のために芽を出し、先端の孢子形成部から孢子を飛ばし、すぐに枯れます。

右の写真が成長したスギナです。

スギナは川土手や田の畦、原っぱなどにいっぱい繁るいわゆる雑草の一種で、とつてもとつてもまた生えてきます。

しかし秋には枯れてしまい、冬の間は枯れ草しか見られません。

でも、地下茎や根は生きていて、そこから翌年にまず生えてくるのが、孢子をつける特別な茎(孢子茎-ほうしけい)であるツクシです。



[ツクシは確かにスギナの子]

2枚のうち左側の写真、ツクシのそばにスギナが芽生えてきています。

右側の写真はツクシの根元を掘って取り出したものです。ツクシはこのように地下茎でスギナとつながっています。

スギナはシダ植物の一種です。

シダ植物は花を咲かせず、したがって種はつくらず孢子で増えます。といっても孢子から直接シダの体ができるわけではありません。

スギナの場合、孢子をつくる特別な茎である孢子茎を春先に芽生えさせます。それがツクシです。

ツクシの頭から出てくる緑色の粉のようなものが孢子で、上の顕微鏡写真に示したように4本の弾糸をもちます。孢子はこの弾糸をひろげて風に乗って遠くまで飛んでいくことができます。

そこで水分を得ると孢子は発芽して、約2mmの葉のような形ものになります。これを前葉体(ぜんようたい)といいます。スギナの前葉体にはメスとオスの別があり、メスの前葉体には卵が、オスの前葉体には精子ができます。水があると精子は泳いでいって卵と受精します。この受精卵が育つと若い植物になります。それが大きくなったのがスギナなのです。

スギナの場合、以上のようにして増える以外に地下茎から芽を出して増えることもできます。

スギナが光合成をしてつくった養分は地下茎に貯えられます。その養分を使って芽を出させるのです。スギナはとつてもとつてもまた生えてくるのはこういうわけだったのです。

早春に芽を出すスギナの孢子茎が「つくし」です。

茎は柔らかな円柱状で、退化したはかまが節についています。

繁殖のために緑色の孢子を散らした後にはすぐに枯れてしまいます。

その後につくしの脇から緑で細かく枝分かれした、スギナが芽を出し

て勢いよきはびこります。

手がつけられない雑草として嫌われています。

